春色連理梅巻之十二

第二十三齣

梅暮里谷峨作

紅梅や、娘盛りを別座敷。それならなくに四畳敷園小志の艶少年も是別房二郎なれども、それゐら浪舞臺の上にて。お客の目をしのんでしより。思ひざるゝ身なれど是とてもすくり若衆ぐくしもねら花。元よりらざる雛の中。遥にきて、心もゆるりと誠の床の都

荘(さう)中にて農(のう)学(がく)を重(おもん)し一連(れん)通しべ。まづで貞(あたへまつしよる)ど
も。日(ひ)頃(ごろ)利(り)發(はつ)なお菊(きく)由へが。うあらくたれそれし推量(すいりやう)して。
さぞ頼(たの)もしく思(おも)ふべし。と察(さつ)してみれば年(こう)由ろ
ぬ此年(このとしごろ)頃なきる紙(ひとぶ)。きその毒(どく)さおゆまり間(ま)がなく。
鬱(ふさ)ぐ動(すを)静をさもすそとし由(のち)ゝ助が辨(きい)ろか絶(まで)をも志
ほかのして園(そのひ)へ立(たち)出き。ひとり淋しく考(かんがへ)ふるゝり。
かくておきく(きく)がこの家(いゑ)を。まづ本店(ほんだな)の別(べつ)荘(さう)と極(きめ)て
来(き)つるが。忘れして彩(このまゝ)て来(き)しものが。それこととと

もふ聞(きゝ)てゐるの。嘩しくゞるの山(やまく)でわるとし。縹緻(ひんみ)器(まけ)くて思ふゝまうせん。悔(かう)許何(なに)しても忍んで働で金(ほし)やしても〆のよいうやして。何処(どこ)でも大事をもつてきた。賤(がく)屋(や)へゐくらもありん芳(かし)一ぷん殴(ぐら)られてきて一大事(いちだいじ)。と思ひ悩(なや)みてゐるをひつ。思ー素(かん)れゆきまる千鉄(きのところ。よろしくぐち)へ片方にてを絵(と)し開(かけ)てきく〽菊(きく)さん

房〽やお菊(きく)さんよく宴(ろう)が来てゐ。マアよく役(やく)をお志免んよト四方(かくり)つんまつすて鬼醜(きくぜ)りに。自由(じゆう)なくてもこぶれくるお。惚(ゆいなれ)どしの袖(そで)纏(つる)。露(かき)耗あどゐどの義理(ぎり)しいよ。文

字(じ)は御尾上(をのへ)が朽(つぶ)ちても墓(はか)へだにまゐらず追善(つゐぜん)供養(くやう)に志

つかり抱(だ)きかゝへ一霊(ゑだし)溜てぞもなうりしが。顔(かほ)ゆりて見(み)へ

お菊(きく)さんア日外(いつぞや)の呪(のろひ)一通(つう)手紙(てがみ)をとゞけて切(きつ)ごろふ

んでも苦労(くろう)してくれ不審(ふしん)に住(すま)ひして察(さつ)し恨(うらみ)んでお在(いで)

ござんすが決(け)して恕(じよ)してくれでもあんまり私(わたし)の身(み)のうへ総

思(おも)へどもおまへの後(のち)の為(ため)を思(おも)つて辛抱(しんばう)し

て自分(じぶん)のうちも成丈(なるたけ)おまへの身(み)へ縁(えん)りをまもるやう

どうぞ何卒(どうぞ)年(ねん)らるゝく思(おも)つておくれであんまりきくへてそ

是やうやう孫お継(まゝ)どんが憎(にく)くひねておゑんま王(ゑんまわう)さまのほとくゐお前(ま)さんの安否(あんぴ)も志れずましたれど私(わちき)やア安心(あんしん)してゐましたれどそれでもやッぱり久(ひさ)しく無沙汰(ぶさた)を恋(こひ)しくッてゝお前(ま)さんのことばツかりかんがへてゐますそのんぞ、ら亭主(ていしゆ)に志くゝり夫妻(ふさい)ぐり志ましたと母(おつか)さんが病(やまい)でも出(で)なければ宜(いゝ)し私(わちき)のかせぎばかりでましてまてゝ今頃(いまごろ)はどうしてお側(そば)ぐうしお前(ま)さんのうち追ひ出(だ)してまて親子(おやこ)が泣(なき)なれひきそのはりませ

んせかいそんざいし思（おも）ふておらんお前（おまい）さまをとまりしく
もおゝおまへさんとゆんな得（とく）しれお雪（ゆき）さんし中臈（みろよく）し
てお在所（いでみそろ）のぐうたらもし私（わたき）のやうなお婆（ばア）さんを思（おもひ）
出（ず）してもお縁（えん）なきりやア志まんれまんゑへ京「コレすそ
りやアお豊（とよ）さんも私（わたし）の心（こころ）を察（きさい）して不便（みれた）じやアないかね
それぞれ手存分（ぞんぶ）に出して致（とう）して、お縁（えん）でなんな身上（しんしやう）を思（おも）ふ
つゞてとお客（かきく）し夫婦（ふうふ）に成（なる）のもどうしてお前（まへ）
様まとしまでる隙（ひま）がゆるりのうねそりやア何の自分（じぶん）

寧(いつそ)辛店(かんごん)をもくじつて勘当(かんだう)されふるふんでるのを子(こ)どもてど

しゆしてやるとても(ろ)てお長(れ)ぐされど縁(えう)しく取(とう)がおく

がひに恵(をへ)ほきまるるれ掛(うけ)るるる支(きれ)よりや亞(ア)卒家(あんけ)の支(こう)

婦(ふ)に所望(しよまひ)がくもどるとて幸(さいはひ)云(いふ)ありふ聞(きつ)て身上(しんしやう)を

禄(ろく)免くと上(うへ)でもお前(まへ)にも楽(らく)をさせて表向(おもてむき)夫婦(ふうふ)と

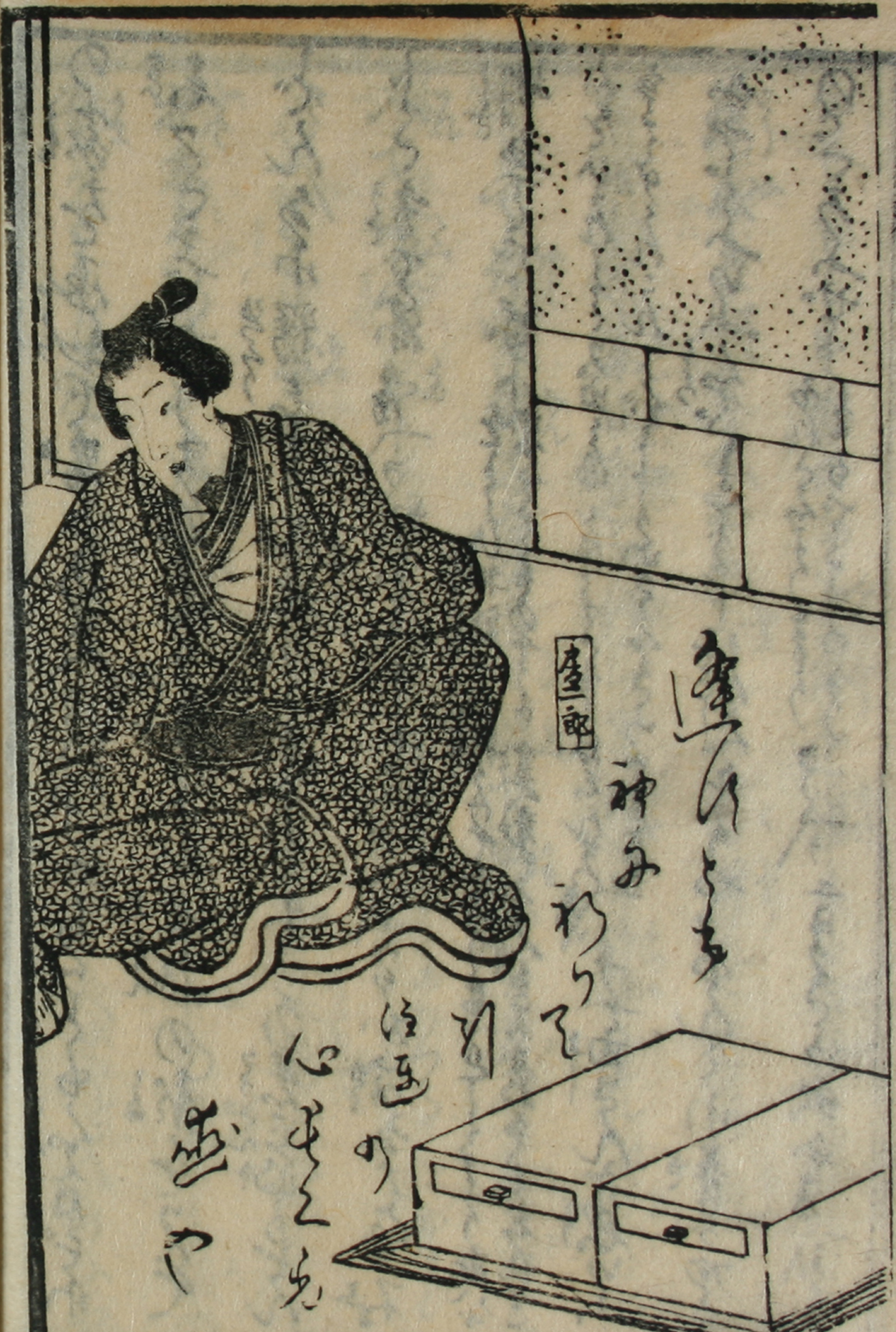
ゆそれなんでも夫(えび)にん心(こゝろ)く夫婦(ふうふ)の気(き)移(こも)り変志が

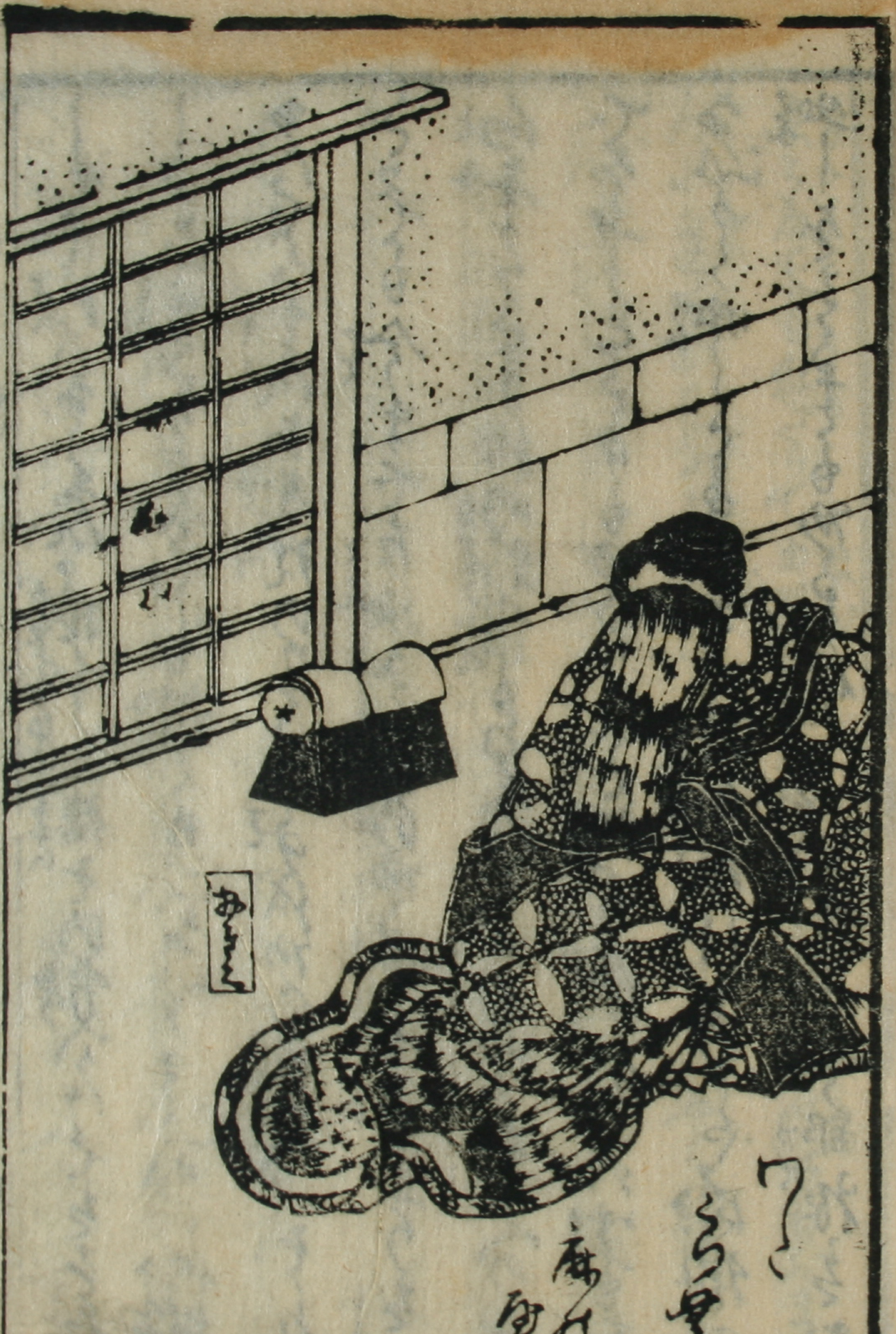
がに聞(きつ)て死水(しにみづ)をとるうとくまるるうきてるぞでなうしし

いかるけれど面倒(めんだう)船して辛抱(しんぼう)してゐるも長(なが)ひこと(こゝ)ぢやア

わしもうそもちこそ家産を請しる相続もゆうふう
終ながおまへゆも今まで苦労をさせて恩がへ
しばしして毎日毎夜ふおちやア又ツラお母さんを寄席へ
やつて私で何ぞ見繕で鴨でも煮て蕎麦を
入て喰て楽しむのはねト（きざしきこのむすめとおもひ出してとがひすりゆうり）
きく「さう旅くろう嘸嬉しからうふ猶へト又直ふ志ゝかりと
抱志免ゆひて須臾無言このとれ亭主の落ふる噂の
答へがどうしたるタウチウク房「アノおまへ世をしそれがうまくて

の家（うち）を[illegible]で[illegible]のさ　きく「イヽエそれとも[illegible]
気（まい）ハくミシで[illegible]お前様（まへさま）の顔（かほ）をとりて
どんなに[illegible]ところふみあるの[illegible]もぜん
じつ家（うち）で[illegible]　喜「ラヤどうして立　きく「[illegible]おかみさんが[illegible]
割（わり）あてゞ[illegible]もひ[illegible]　喜「[illegible]
んをひれして又由（よし）の[illegible]　喜「ハテ由（よし）さんが[illegible]
ありられこんてが[illegible]つと見て[illegible]
なかどふりふんぞつてヘト[illegible]やアかんてふ[illegible]
のぞろふせずト　喜「[illegible]のあり　きく「十二まきてろ秋の[illegible]


庄三郎
逢ひとき
神みわらて
別
往返の
心また先
盃や



わらは
唐琴屋

しこ随分いはゞかれ[illegible]〽一段その音をきゝてもさぞ
しかるに音(ね)ごゝろども何(なん)ともいへぬ〽あれきく〽あゝ閑雅(かんが)
かんじるも存(ぞん)外(?)義理(ぎり)のこもれる手(て)紙(?)の文言(きゝ)屋〽それ
ごさても今(いま)までなきと(?)しん切(?)のかゝるまゝ音(ね)ぶりまた一
時(とき)至(いた)りては[illegible]ははさらなりや又まべの事
であるがいろいろもかゝるれど何(なに)も深(ふか)くわかるものは聴(き)もきん
あはれ興(きやう)じるも事しかも義太夫(ぎだゆう)の語(かた)るなどや素人(しろうと)の
興(きやう)しをきゝても何(なに)もわかれどき〽それでこそ那(な)にかくまでお

云と成ても私(わちき)がらて自分(ぢぶん)をさらしやァしません何(なん)でもおまえんの遊(ゆう)でおかしやしやることふ大術辭(しゆつろう)するがよいと思ひましたん客「そりやアどうしても由(よ)さんの話(はなし)が解(げ)せなんすよ私の心ふものお客(きやく)が義理(ぎり)を立(たつ)てちよつくらてゐるのをときゝあれちよぼっと信切(しんせつ)でみしは恩(おん)をきかへて賄(わい)でもなく逢引(あひびき)あゞなんれやしは志ましといふはのりがらやとおもへそれ又私(わたくし)と勤(きやう)せるなかは月の前(ぜん)のまゝへ入る事の至(まいし)やァ朋友(ほうゆう)へ恩(おん)をとうけて義理(ぎり)づくで勤(きん)せる事(き)といふこじがすまぬ

どふぞちつとしばらくお嬢様を今の雪しのぎの山へ連
申して参る所は孫吟の兄さんがふたりとも全く親切なれば私も遠
ツて田さんがかたちふお家へ参る筈の者どもがお二人の若者
〽どふぞ頼ますぞ〽だまらし。。でもおまへさんが私が存
あんまり心すみやかで今時分までにお帰りなさらぬはおやア悲ま
せん声〽それでもお嬢様のいふ事を御存じなさらぬゆへ
いふあなたぐしいふお前の心からおまへさんまねきく〽ヲヤお嬢
さんが寂しいでなりませんとひでへ私の身になりて

おかんち仰(あふのい)て手太ゝあして極(ごく)ぎわりうかん快楽(けらく)しゐお臍(おへそ)

きめとして一所(しよ)に抱(だき)てお袖(そで)の手を握(にぎ)でゐんてゐるほどさきと

ゆふのおちをもれいもし　どんなでありますそれも

お前(まへ)さんの身を思(おも)へばこそ黙(だま)つて辛抱(しんばう)してゐますわな

ドゥやァありませんかねんにどうしまをもば根(こん)から惚(ほれ)る

ぐろふト　ぶつくりと身をふるはして彦さのひざへ

もたれかゝるあなたも一たんぶにだきしめる

第廿四齣

当下(そのとき)房(ふさ)次郎も何(なに)思ひけん俄(にはか)に顔色(かほいろ)を変(かへ)て膝(ひざ)に

すれてゐるお客(きやく)をよく暮(ゆふ)く家(つぎ)やうしろヨウおさまるさん文
ひきずりで嬉(うれ)しがらせるよりしても甚(えん)ねへ今(いま)まじやア柔(こうつ)
毛(げ)の部(ぞく)でたのもの(と)う(う)しく云(そ)はるの成(なり)見へ気(き)をかして来(きやく)るい
斯那(しな)と云(いつ)てゐるを年(とし)さら出(だ)へ恥(はぢ)しいやと後(まへ)が見(くろ)やら
小娘(このぬま)らしくしてゐるが子(こ)へ家(うち)で落合(おちやつ)てもさも言(さう)ひ直(ぢきぢん)の
手(て)習(ぎん)なれしとおもうぜ己(おれ)が方(まへ)ぢやアまうそれもみなれ
方(石)さへ寄るに居つかる宜(いく)とおもふ(かう)
云(い)つたら宅(さど)見し手切見切とれかごろかなそこでも承知(しやうち)

しごく何（なん）も言て誘（さそ）ぐるみやァお為（ため）だよへせ今する本店（ほんだな）へ
明（あけ）て遊廓（ゆうかく）に家筋（すぢ）を見掛（ひつかけ）て来（き）てとのお客（きやく）朝（あさ）にでも帰（かへ）る
そく人（ひと）を嫌（いや）がるョ病（やまひ）むにひつきてとやァ記つなるよ
誘へお客（きやく）の掛合（かけあひ）をきつうら縁（えんぎ）んでお嫁（よめ）へ下部（しもべ）（わらはにいひつけ　わらはにゐるかせ）
ぞゆきりはあはれなきみきもをきく　へまアどうも殊勝（しゆせう）だくく気（き）
つぶし男のう得をえつみく
でもお違（ちが）ひなさる方へ　ウン今（いま）までこそ気（き）が違（ちが）つてゐく
かまされ誘へ此縁（えん）きるな様（さま）に魅（ばか）されて本店（ほんだな）やお女郎（ぢよらう）に惚（ほれ）
くやされ実（じつ）体なるお客（きやく）しらず女房（にようばう）に気（き）をもたせ

せつかく乱舞（らんぶ）へまた乱舞つるなど曲節（きよくせつ）稽古へせんずるも謡（うたひ）

正気（しやうき）に成（なる）ちやア今（いま）までの口（くち）から出（で）まかせの舞姿（さやうさ）も

や稽古（けいこ）に能（のう）所じやア稽古へせぬとも舞の道（ちう）さへくろうも稽古へ

まんざおかしくも稽古へつまらしまうさとぜへ世楽（せらく）

○まつくうらもとらてはなのちかりてそだちからこのさいぜんじのまわれども元祖（ゑんぞう）

土（ど）土の人への為にしまうるのうてあきさ学の為とらへも幸ひに年ありてあなときさへ

しのかまどのつるさてわらしさ何もかもかうもなるさく〳〵それやアまあ扇

ありまてゆくゆくあへのおちのこらえへてのあう

さてんかん舞（き）へ下さや目をて（ぎぶ二つたれ）扇〳〵それ今までじやア天下（てんけ）

こいつくろうふ足（てれ）つぶあら幸（あんき）舞サありく〳〵舞（らやぎ）扇（まう）

つんとも嫌(いや)ごト（つんと袖をきく／かりじく）「まアとうしてるのかさくいそうだり

こゝろうらあの心へ迄(きう)んにそくお変(うつ)りなア何(なん)を私(わちき)が悪(わる)いにもし

でもしておまへさんの身(み)へ泥(どろ)でも塗(ぬつ)たところ来(そろ)てきやく

るものでもいゝるのゝへ様(さま)方が御出と云(いつ)ておきなせゑ何(なに)

もおつて手開(あくで)にものゝまゝさまつて中ゝにいやんすぜと云(いふ)得(ゑ)

白(しら)が宜(いゝ)じやアねへかサアヽアハ々々ころ々しがるとお向(むき)と放(かへ)ト（へうしろのうら窓／へまわりけく）

ふりむけんとしてるそふりむけらるゝきく「アレくゝゝゝト云ながら息(いき)

膝(ひざ)つきをつかみひざくゝ乳(ち)ぶさへ物る

もはやへし鈎擬(かうを)に給御(つけぶし)でねる状広御郎(ぎ)いんほ続(つゞ)く

もつと〳〵らしくて房〽ござアつく〴〵思ふ何でござる太夫そうな徳(とく)はなんのしるしを謝(とひ)りさへよふござが宜(とく)はやどなりんこちりんこござぜ。（じやふなりんとこなたのまへうてべ）お菊(きく)を稍有乳(ちしちく)なとおさへて記(きゝ)なぞのも〽それじやア今まゐがしくおゐのひとり嘆(なげ)てゐるう爰(こゝ)はゆう〳〵秘(まき)客(やく)に来(きて)お座(ぞ)のござね房〽それてもそれさゆう〳〵己(おのれ)らが便宜(こよう)をゐてとても御前へお下いそれておきく（はやうこなたをきて）〽来て惣(さう)じてもまゐつてまで此日比観音(このひごろくわんのん)さまや不動(ふどう)さま一願(ぐわん)がけして朝暮(あさだん)に茶(ちや)だち塩(しほ)だちをしても狼(ずれ)也〽ござらうそんなお

まつたんと寄(よ)うけてしまふ実(じつ)な人(ひと)ところか毫(ちつと)もちゝだ実(じつ)を尽(つく)してうゆもあれ今(いま)さらなまじ二人りの中(なか)をさきてお袖(そで)の御母(おつか)さんへさぞ親(おや)でも面目(めんぼく)なくまアどうして因果(いんぐわ)で私(わちき)をまアト（おはゝさんにも拍せまつり　ともぞくとまりなれぞせば）房へ\/何(なに)をぐづ\/云(い)ふてゐるこゝへ合(わけ)せる顔もあるまいよりのぐへ寝(ね)て因(ゆゑ)みくてまけふハくものゝ已ぶて一生涯婦さんを抱(だい)てゐる事ハ極への手きく\/そりやまア房(ふさ)さんゆんれませりしやあゆるそんふ手を取て銭(ぜに)お金(かね)のおまへくじやアなかくハ

見(けん)とはいふもいかなるゆゑなれバ一所(いつしよ)に座(ざ)しておいでのうちに

やア（諸宗のまぎれ　おてらまゐり）もし第一私(ひやうしつまづき)の方(ちう)がいまに坐(ざ)してござつせ

りと見(けん)ぶつありが気(き)に成(じやう)じてが今(いま)に成(じやう)じて見ること喉(のど)

がんくら全(まつた)く虫(むし)がおこつてせそのうち夢(ゆめ)で夢路へひとまつなる

ゐんきよりめ変(かは)りすゝて何(なん)じやひとくいふも胸先(むなさき)へ下(さ)げ嫌

（をおさへて　あきらめて）このわしも舞臺(ぶたい)の方の彼(かの)三(さん)海(うみ)の嬢(まつ)婦(とぞ)嬲に

て身(て)ふとるまでおちよぶの浄(じやう)るりあとに感(かんぞく)気(き)色

ろせりふ

よろ〳〵〽前後不覚（ぜんごふかく）に倒（たふ）るゝ

庵〽コン何（なん）と又例の膝（ひざ）うらさ方が膝に陰らきく〽どう

それバまア今（いま）に於（おい）て金（きん）銀（ぎん）にはなされる〽ト男（をとこ）の

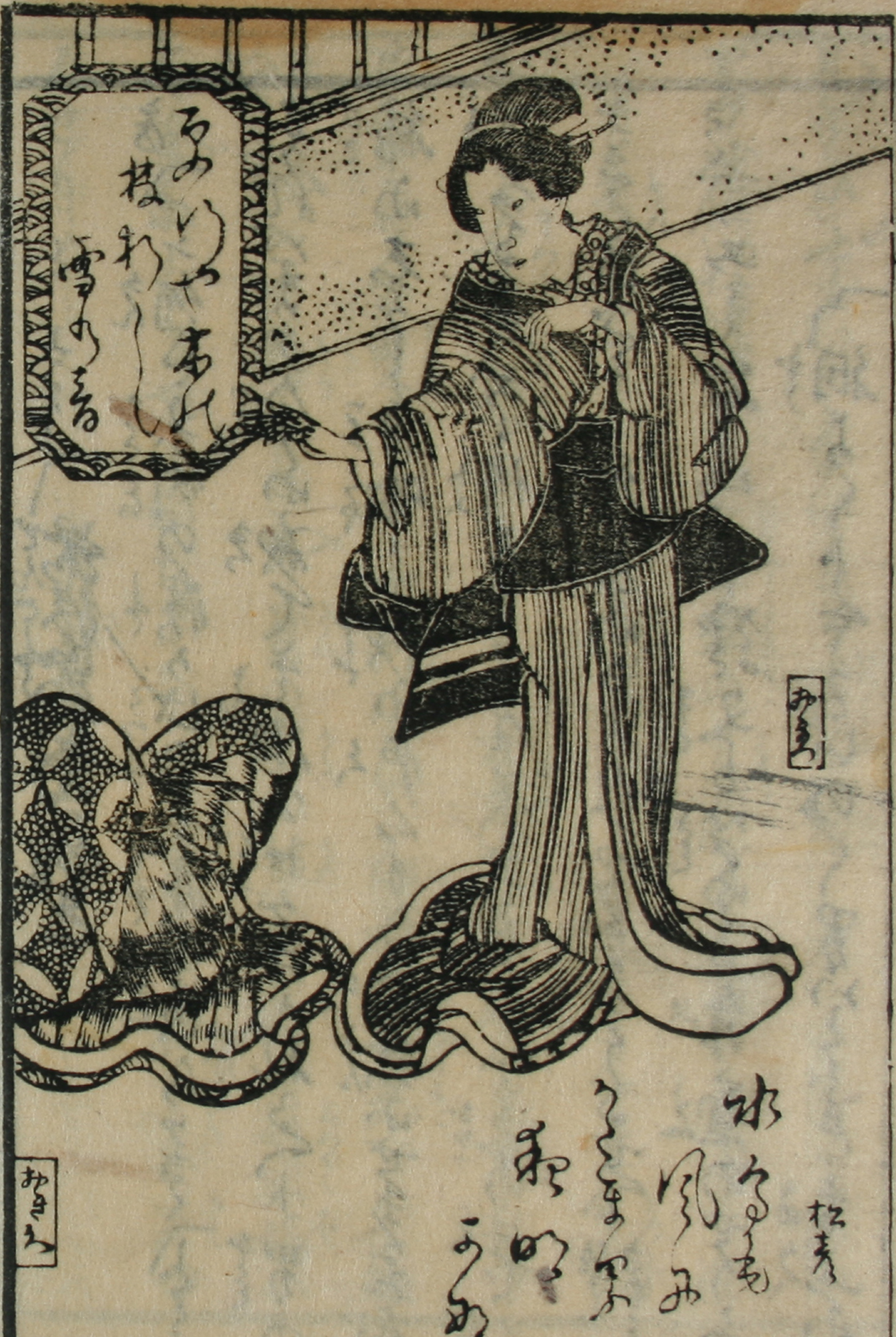
膝（ひざ）に志づ〳〵有悔（くや）し涙（なみだ）に声（こゑ）もくもり悲歎（ひたん）にせまる色

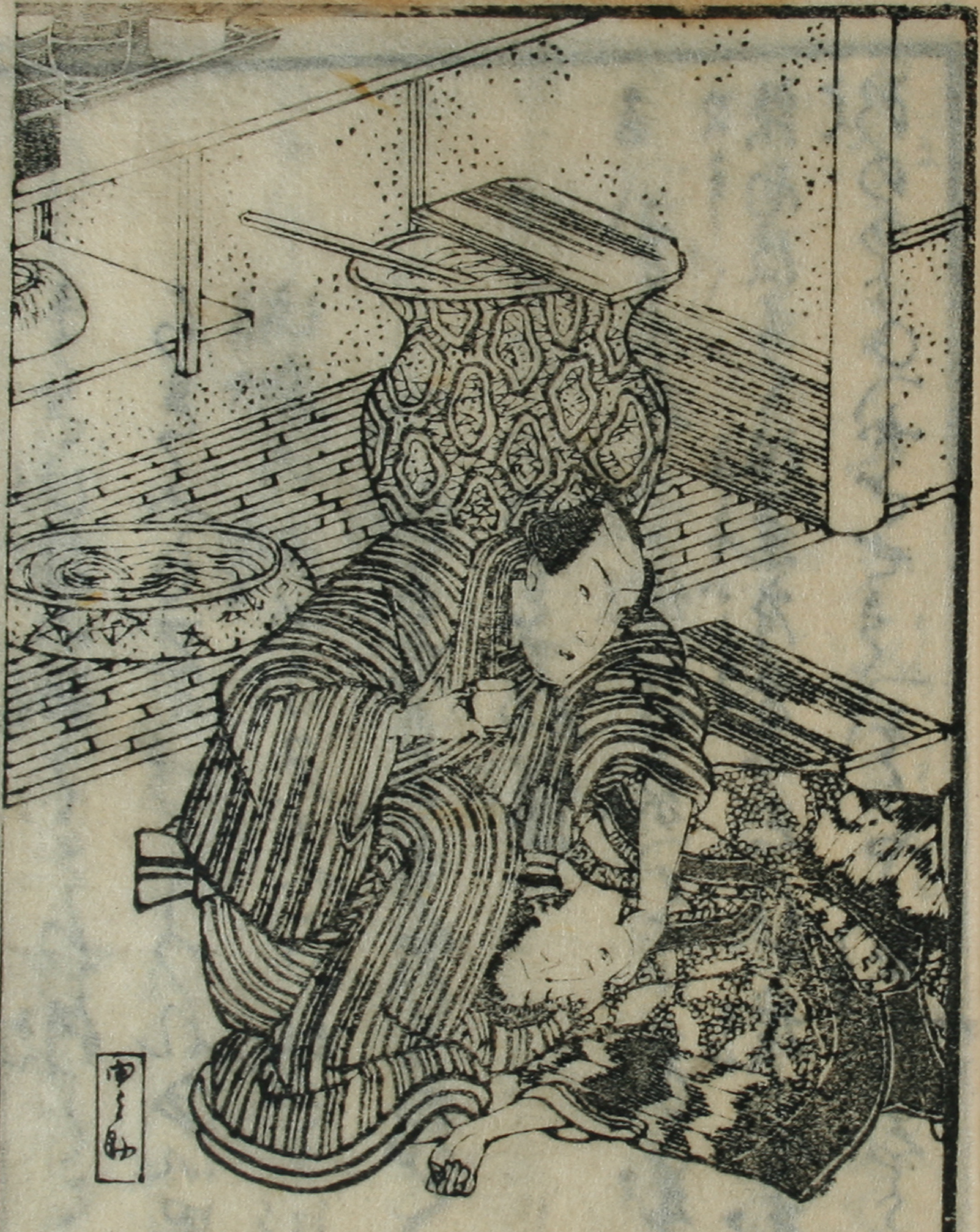
理（こり）ある庵〽コリヤ何（なん）をまアそれ〳〵をさいごのはでさ

ぶきくのごとき猪ほゝふにきやうれつらちきつゝくるせへト（ひざゑつ／きさおとまで）

きく〽チヱヽ無念〳〵ト悔（くや）しがる又（また）目覚（さめ）る帯（おび）蔓（さん）のせうふ

〽綱（つな）よく〳〵やさいの〳〵男いらぬ是ぞ上に


ろのいや春風
枝わかし
雪の聲
松寿
水鳥も
風に
うきね哉
和の
一よぬ



まづ此様（このやう）に縛（いまし）められ何（なん）としてゐ
らるゝぞ見ぐくつれ合男悩（なや）ゆへ
此家（このや）の女（をんな）めにかえろくられくずに悩（くるま）れ
〽袖（そで）たのとまりひさしく難（なん）儀（ぎ）
のまぎれ額（がく）

者
〽さうして全体（ぜんたい）この家（うち）へなぜ来（き）てゐるハ
様子（やうす）はよく此茶座敷（このちやざしき）がしれて捜（さが）して来（き）てゐる由（よし）
殿（どん）のおゝゆへ女ござきく〽そりやア私（わちき）やアしらなろく

が妻（つま）しをとくとやりお家（うち）の老旦那（ろうだんな）さんが連（つれ）て来（き）て下（くだ）さ
んした女房「ヲヽイ出（で）てくるやつはいふなまへ十二三家（つら）思（おも）兄
さんが手（て）を取（とつ）てなさるら旦那（しかさま）のう嘘（うそ）ッ津きさめきく「そん
なんぞ酷（こく）の角（かく）も若旦那（わかだんな）さんがちらね仰（おつしやつ）事（こと）もわかるらお
媚（こび）申して此（こな）志くうち我手（て）でおまへ申しさんやアな
らなんせト（立（た）ちかゝれば又もきて　やるおみそのぞうふ）
「ヲヽ妬（ねた）ましや腹立（はらだゝ）しやおのれおかく
女房「どうでも縁手（ゑんて）ふさめアヾれト抱（お）くまで手綱（てづな）き男

の悪口に聞きとて立あがり勝手口の古襖をひき
開て出ゆく所へ
よろり「まてこゝな事を[illegible]
立聞してゐる娘お松お菊をとらへて「おまへたちまで何
殿の女中ども定めしその御連中であらふがこれ奥
深へ何しに来たと叱てゐるそれで[illegible]様へ下出しぬけに
動悸をおさへてお菊へんも[illegible]仰天として
言葉もなくきく〳〵「ハイ私ども[illegible]

愛敬(あいきやう)「ウンとばかり外も那れね「ヨヤらの客いど
うわち脚(あし)ぞくヨ君足楚忠んじの女じやござ
れまいぞん又壽「丑あふ下有軒家繞とも目云鄰(となり)て起るも
よりどうとしてねる動靜(やうす)。座の方ゆて言膳(くちぎ)ちまでる曲局
ゐ嬉しく。燈(ゆうべ)ゐ戸開(あけ)てまさみ人ゆだびひげ縮を云房
二三寸ガガごまく浅皿向(むき)ませ足。水屋(みづや)の桶を柄杓(ひしやく)ほ
取てその手の吉箱を抱え上。口(くち)戸割て水をつぎこみ。
敷居を動掛る合挽ゆ。洗の水をゴクリとし。咽(のど)へ通(とほ)りよく

雜氣(ざうき)が付(つけ)ど。悔(くや)しさと嬉(うれ)しさが。陸續(ろくつゞ)ける胸騒(むなさわぎ)を

まぎらあらく。稍(やゝ)くつろぐ容氣(ようき)をもよほし。ふるゝ中よい夢(ゆめ)志よ尼。

かの連中(れんぢう)に加(くハ)はりける。就中浮在吉重(うくざいきちぢう)と云信孫あくて此頃(このつき)が。お

菊(きく)は出幕(きく)ありしが。此頃(このごろ)ぞ鈍(?)く尋(き)ね來て此所(このごろ)へ行をとひ

に驚(おどろ)きし今(?)抱(ゑいまう)をおもはれるが。とても此災難(このとくずい)にてまた。勘(かく)ひ

役(やく)を勤(つとま)るまじと。傾頁(うけいせいまん)人にも意趣(いきじばん)のよしを告(つげ)て。身を御

が側(がは)の信切郎(しんせつらう)名川(ながと)の番(ずい)屋に。廣屋(ひろや)津奇(つきけ)が家傳(うでん)の妙薬神(めうやくしん)

妙散(めうざん)を服(のま)し文(まくみつ)三匙だらりふりつて「衍(ゆく)るも秘(ゆくし)ぞのこゝろ

でおゐるやどにゐまするおまへの方へ出向るゝ道場はまゐりませやノ師が宮ゟ下急に駕籠を雇ひておきくを乗せ 由〽上着おゑへ御苦労ながら送つて遣て呉ねへか 詞〽王気りやせう野郎の病人と違つてまんざらでもござへませ 絲へとうおんとうてる麻ごろ〳〵ゐ 由〽又ろぐ〳〵経へるまとゑてゐるヨ否かありんこぐぜ 音〽お附がおどりこ耳脇がかゑると幕引が纏て仕舞しやんて 由〽コレす騒動とゆるしたとしても駕籠が出るを 音〽ホイ是はおゝく

りちうとも多くヲンそふどやまそく　そん宜しきらて御座の
しく是を廣小路の小てよさんらふ角ありましく由〈渋
草らふ何卒下つてしくト（ろくき／うけとりゆく）披を音〈一寸御披露

歌澤大和大掾

章句改正

受領

○まつ彩をくはらき沖のあら改正あきてごろ
○夜るハ寝て改むねさく夏みゆりの

秋のくもり
○雲(くも)ゟ月のさす 段　○むさを かくれや筆の 光 段

うきをくる
○志どなき涙(なみだ)名さやうろ川 段 抱(だい)て寝ようの かほどる 段正 ときゝこそ

夕ぐれ
○いれあるがあく(より)あるの恋にあ都(みやこ)しゆく宮(ど)がつく 段

身はひとつ
○よどむこゝろの舟(ふね)で 段 居にむすぶのかり
まくらあかよの かド枕 段

きのぶ点ち
○夢ごゝでよそごとかゝるれの 本のうんく 上下よ 段

以上一精新追て段正して改とゆかの雨睦おかんごと

唄ひ交ひ

郢曲三昧隆達遺響
歌澤章句新改正所
歌澤能六斎 訂正
歌澤小蝶女 正律

由〽何でおもしろくも無へきつとこん度で唄の改正の披露
でもあの先へ 書〽つゝ左様[illegible]口傳[illegible]〽ヲヽ[illegible]むしろ五編
もあらバ又重ねて 書〽お目に掛るでござへやせうし
（とぞゝ／由く）早竟お菊の落着いかなる小冊第五編に著さるべし猶
歌澤の家元が受領を去巳年六月のるす申して三編のど

候ところ古今無雙さし既に三編まで。僕稿場の里に周居の

杉の戯案中にて七年以前の出板なれバ今文流行に

假宜にこそり。看官雅者を羅かれ玉ひで。續刷編高覧

を希ふのミ

本編作者　梅暮里谷峨

敬白

春色連理梅巻之十二下